NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS

B!E NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS ART & DESIGN CENTER NEWS 2014.Vol.39

cultivate

耕す

Cultivate 【動詞】<土地を>耕す、耕作する <作物を>栽培する <細菌を>培養する <才能などを>養う、磨く <人を>教化する、啓発する <芸術などを>奨励する <知己を>深める…等々。耕すという意味のラテン語「colere」から派生したこの言葉は、英語になると「心を開拓する(耕す)」といった文化的な意味を含み持つようになり、cultureと同様、文化や教養も意味する言葉となった。

「心を耕す」とはまさに制作活動の要である。芸術大学におけるギャラリーの役割もまた、制作活動を耕すための一助といえる。開設から10年を経て新たな節目を迎えたA&Dセンター。あらたに"cultivate"するべき展望とは何か?

アート&デザインセンター運営の可能性

名古屋芸術大学アート＆デザインセンター(以下A&Dセンターと表記)が2003年に設置されて11年になる。2001年に美術学部と音楽学部が新コースを立ち上げ、2002年に美術学部デザイン学科がデザイン学部になり、その翌年A&Dセンターが開設された。

設置の目的は「学内外の文化情報の収集・発信空間であると同時に、社会に開かれた教育文化施設として、地域の方々に開かれた場を提供することで、美術教育のボトムアップを図ることとしている。施設は二つのギャラリースペース、公開制作可能なスタジオ、展示空間としてのラウンジスペースなどで構成され、作品発表と芸術文化活動の場として機能している。」(大学HPより引用)

全国の美術系大学には立派な美術館を設置している大学が多く、本学の美術学部やデザイン学部では、本格的な大学美術館設置の要望があり、必要な施設であると認識している。買上げ卒業作品の収蔵、学生や教員の活動拠点として、また学芸員課程との関係で将来的に設置することが望まれる。

美術館は、博物館法で美術品を主たる対象とする専門博物館の一分野とされており、博物館の概念に包含されている。博物館の一形態という性質上収蔵品の蓄積が展示と並んで重視されているが、本学のA&Dセンターは、収蔵品の管理はできず社会に開かれた教育施設、情報発信施設としての運営が行なわれている。

そのような中、社会芸術環境は大きく変化し、全国で現代美術を中心とする芸術祭が開催されるようになり、あらゆる場が展示会場となるなど美術館の存在意義に変化が出ている。

国において2001年12月に文化芸術振興基本法が公布され、子どもや若者を対象とした文化芸術振興の充実、次世代への確実な継承、観光・産業等への文化芸術の活用などの重点施策が示され、2012年6月には「劇場、音楽堂の活性化に関する法律」が施行され、心豊かな生活及び活力ある地域社会の実現等に寄与するため、劇場、音楽堂の事業、設置・運営者及び実演芸術団体、国、地方公共団体の役割や基本的施策が明確にされている。

このように国の新たな文化政策は、施設であるハード重視から創造者であるソフト重視に政策が大きく転換したと言える。A&Dセンターは施設として不十分であるが、運営は創造活動支援、研究活動、情報発信について、中期的な事業スケジュールを含む「A&Dセンター運営活性化プラン」を策定し、運営の可能性を広げて芸術大学の創造活動拠点となるよう願っている。

竹本義明　名古屋芸術大学学長

レポート REPORT 01

愛知県児童総合センターと名古屋芸術大学の連携事業はじまる!

冬季特別企画 「ちずであそぶ」

2013年12月15日[日]、22日[日]
愛知県児童総合センター

「ふみふみぺたぺた どんな道ができるかな」親子で体験中。

「ふみふみぺたぺた どんな道ができるかな」「みつけてつなげて」「未来の地図をつくってみよう」。「球体地図」「けっかんをなぞってみよう」「電灯探検隊」。これらは2013年12月15日と22日に美術文化コース２年生3名とアートクリエイターコース１年生11名が愛知県児童総合センターの冬季特別企画「ちずであそぶ」で企画実施したワークショップです。2004年より美術館と継続的に連携してきましたが、同センターとは初めての連携です。今回は"地図をテーマにした新しいあそびを学生主体で開発する"もので、なかなかの難関だったようです。子どもの活動を手伝った経験がある学生も、企画から考えるため戸惑うことも多いなか、スタッフと直接に何度も話し合い、週を重ねるごとにアイデアを実践可能な具体的活動に成立させることができました。発案から準備・企画実施まで、共同作業が前提となりますが、グループとして個々のアイデアをどのようにまとめていくかが大きな課題でした。"準備"がいかに大切で大変か。当日ぎりぎりまで奔走し悪戦苦闘したなかから多くを学んだといえます。学生のアイデアの中にはスタッフが着想しないものもあり、"覚書"に示されたように「センターにとっては若く先入観のない視点に触れることで、今後の活動をより広く展開する可能性をつかむ契機にする」という連携の意義が多少とも達成できたように思います。そして学生にとっては何よりも「これからの時代を担う若者」として、アートを通じて「幅広い分野で、児童健全育成、子育て支援など、人の成長に今後関わっていく」という社会の成員としての第一歩を踏み出したエポックメイキングな体験であったはずです。しかし、学生自身がそれに気づくのはもう少しさきになるのかもしれません。

前田ちま子　美術学部教授

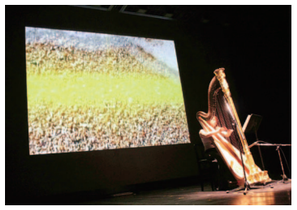
REVIEW PREVIEW

KALEIDO SCOPE 2014

2014年2月27日[木]
愛知県芸術劇場 小ホール(名古屋市東区東桜一丁目13-2)
開場 17:30 開演18:15　入場料 500円
問合せ 0568-24-5141(名古屋芸術大学演奏課)
e-mail:meigei.kaleidoscope@gmail.com

カレイドスコープとは本学音楽学部サウンド・メディアコースが音楽制作や立体音響を、音楽アートマネジメントコースが企画・運営を担当して開催される、最先端のテクノロジーと人間の奏でる音が融合した新たなアートを追求するコンサートです。

生演奏やライブエレクトロニクスに特化したMAX/MSPの技術を用いた音と映像の作品が演奏され、今年はデザイン学部から8名の学生が映像制作として参加します。



2012年カレイドスコープでの様子

NUAnce(ニュアンス)

クリエーターズショップ Loop にて販売中
(名古屋市中区栄3-18-1ナディアパーク・デザインセンタービル国際デザインセンター4F)
販売期間 ― 2014年5月18日[日]まで
http://www.idcn.jp/loop/

NUAnceは名芸に縁のある作家によって構成されたチーム。商品を通し「芸大」の価値を明確にすることが目的で、追々は学校公式のブランドにすることが目標です。コンセプトは「生活装飾」。生活に身近な物にアートの要素を落とし込んだ「五感を刺激するアイテム」を制作し、使う人の日常生活をより鮮やかに装飾します。

参加作家(2月時点):堀本有希、桑山明美、泉奈穂、池田奈穂　ディレクター:伊藤慎祐

2014 02-05 EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:15―18:00(最終日は17:00まで)日曜・祝日休館　**入場無料** どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

2/25(火)→ 3/ 2(日)	第41回名古屋芸術大学卒業制作展	
4/ 1(火)→ 4/16(水)	2013年度デザイン学部レヴュー選抜展	
4/ 2(水)→ 4/ 6(日)	休館	
5/ 9(金)→ 5/14(水)	名古屋芸術大学 美術・デザイン学部 OB/OG展2014 前半 ミラノサローネプロジェクト2013(仮称)	
5/16(金)→ 5/21(水)	名古屋芸術大学 美術・デザイン学部 OB/OG展2014 後半	
5/23(金)→ 5/28(水)	peace nine 2014 版画コース・コレクション展	
5/30(金)→ 6/ 4(水)	創作折紙展 第5回神戸コレクション展	

編集後記

ある人の何気ない言葉が人生に影響を与えたり、自分の言葉が意外な人に届いてたことに随分と時間が経ってから気づく事があります。それはまるで種類の分からない種を蒔いているような感じです。良い結果を願って耕し、ある程度の方向は予想するけれど、最終的にどうなるかは分からない。私の場合、大抵は思いもよらない結末になったりして、人生は楽しいですね!

ちなみに特集の「cultivate」には(ひげを)はやすという意味もあるようで…髭も耕す対象、なのでしょうか。

惣城友美(アート＆デザインセンター)

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分

名古屋芸術大学 Art & Design Center
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　TEL[0568]24-0325　FAX[0568]24-2897

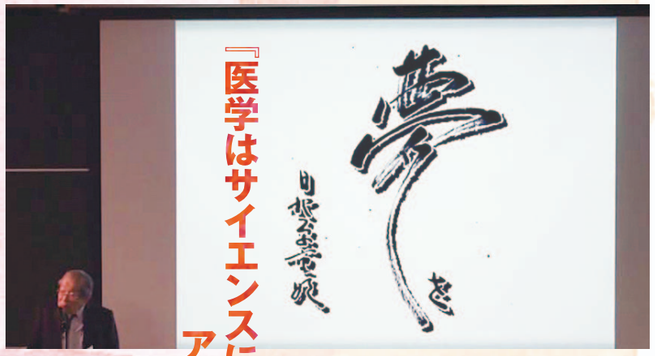
B!E Vol.39
発行日　2014年2月24日
編集　髙橋綾子(美術学部美術文化コース)／惣城友美(アート＆デザインセンター)
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp
2012　Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts
デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

大学基準協会認定マーク
本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。
これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。

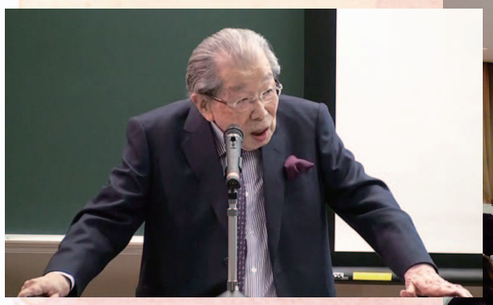
cultivate 耕す

2013年度美術学部
特別客員教授 日野原重明 特別講義

「アートと医療」
2013年12月5日［木］
名古屋芸術大学西キャンパス
B棟大講義室



『医学はサイエンスに基礎を置くアート〈技〉である』



アートとは何かを定義することは難しい。日野原重明氏はまずアートを紀元前使われていた「癒しの技」という意味の言葉として話を始めた。現代の芸術療法にも繋がる医療におけるアートとサイエンスの関係。溢れ返る来場者の熱気に包まれて講義は進行した。

『深く耕す』

人間もまず人間の心を
耕すことをしないと
そこからはプロダクト、
実りが得られない。

『よく生きる』

ただ生きるんじゃない「よく生きる」。
じゃあよく生きるとはどういう事か。
それは皆さん自身が探索して
勝ち取らなくちゃならない。
自分をよく生きるということ。
その生きる為にはアートが
必要である。

『夢を』

どうか皆さんも夢を持ってください。
夢を持った生活が必要。
アートというものはやっぱり夢をもって
そしてそれを実践する中に
サイエンスも
生まれるんだということ。

ガラス工房を視察（写真 傳冨士夫）▶

REVIEW

2013年度アート&デザインセンター企画展
phono/graph
― 音・文字・グラフィック―
2013年11月5日［火］―11月13日［水］
名古屋芸術大学アート&デザインセンター

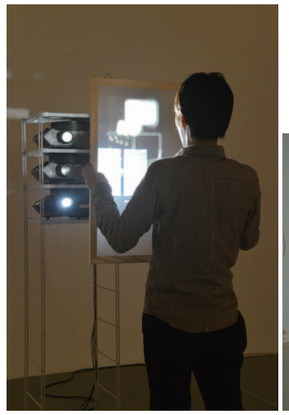
完成度、そして体験する側の充実度、ともに高い展覧会だった。当代きっての名匠が集まり、しかも大阪とドルトムント、2回の展示を経て行われたのだから当然、かもしれない。が、巷の人から、“思いつきをそのまま投げ出して他人を啓発したり自分を理解してもらおうとしたりするのがアートなのね？”とか、“とりあえず作品ならべとけば展覧会になるの？”などと言われ悩み苦しむことの多かったあの日、そんなだけじゃないのよ、と小さな声だけど強い自信を以って言える、貴重な機会となりました。

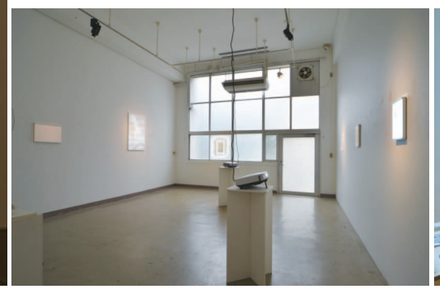
なによりも、それぞれの作家が、1.その作品と関わることでしか味わえない微細な“感覚を立ち上げる”閾値設定の見事さに、2.その感覚の立ち上げのために来訪者の身体を“ナチュラルに”介入させる仕掛けの巧妙さに、3.立ち上がる感覚を“見る―聴く―触れる”のあいだで、物理的かつ／あるいは隠喩的に往還させるための発想と実装の卓抜さに、4.それらすべてを、phono/graphの語に凝縮された全メディア史上のさまざまなできごとにリンクさせ、その意義を“現在形で”更新しようとするスケールの壮大さに、感銘を受けた。なによりも、と言ったくせに四つもあってごめんなさい。とにかく、微細かつ壮大、論理的かつ感覚的（官能的）、なのが素晴らしかったのです。光と影（陰）、振動についての透徹した理解がそれを支えていました。

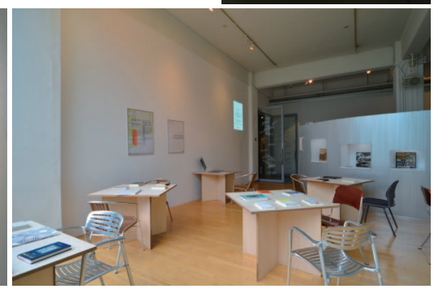
会場には、作品展示スペースに加え、本展をより玩味するためのアーカイブスペースが用意されていた。特筆すべきはその構成。先行する大阪展・ドルトムント展の記録だけでなく、各展示と並行開催されたphono/graphをめぐる研究会シリーズの席上配布資料（これは面白かった！）。デュシャン・マラルメ、さらにはメディア論に関するさまざまな書籍。ネウマからケージらの図形楽譜に至るさまざまなノーテーショナル・システムのプロジェクション等々。これらは、“見る―聴く―触れる”が“書く／刻む”という行為や思考と不可分であることを知らせるだけでなく、作品を体験した人に、その作品を動かすシステムに目を向けるよう促すものでもある。心憎い、粋な配慮と思う。

最後に。展覧会では、お二人の学生さんから作品の導入と解説を受けました。そのころあいが（さまざまな苦い思い出に比して）なんともいいぐあいだったことが、本展の印象を一層強くしたのでした。あらためて感謝申し上げます。

秋庭史典　名古屋大学大学院情報科学研究科准教授







展示風景（写真 怡土鉄夫）

ART WORDS FROM THE ART WORLD

HAPPY SPOT NARAの展示風景

建築家
大西 麻貴
Maki ONISHI

芸術一話 第15話 開かれた建築

ある美術の学芸員さんから印象的なことを伺ったことがある。彼は「洗練された展覧会のポスターは、興味のある一部の人を呼び寄せる効果と同時に、これは私の行く場所ではないと感じる多くの人を排除している可能性がある」と言った。それは建築でも同じことで、一見ガラス張りで外に対して開かれているように見えても、その佇まいや雰囲気が「ここは入りにくい」と思わせることがある。

先日、奈良の“HAPPY SPOT NARA”というアートイベントを訪れた。知的障害を持った方々のアート展示で、絵や音楽インスタレーションなど様々な作品があった。個々の作品が素敵だったのはもちろん、例えば美術館で若手現代作家の作品を見る時のような鑑賞者を選ぶ閉鎖性がなくて、絵を見て思わず笑ったり声をあげたり出来る、明るさや開放感が印象的だった。それは運営の方々の素晴らしさにも影響されていると思うし、周辺のゆったりした寺院の境内や、その中をゆうゆうと鹿が歩いている奈良の街の風景が、イベントのおおらかさとすごくあっていたこともあると思う。

誰にとっても開かれていて、自分の場所だと思えるような空間とは、一体どんな空間なのだろう。小さい子供も、スーツを着た会社員も、サンダル履きのおばちゃんも、自然と一緒にいられる空間はどのようにして可能なのだろう？それは単にカジュアルで分かりやすいというのとはちょっと違って、きっと気品とあたたかさの同居した、素晴らしい建築なのではないかと、想像をめぐらせている。